

パラオに来た。

ミクロネシアに浮かぶ300以上の島々で構成されるこの国は、ダイバーなら知らない人はいないほどの憧れのスキューバ天国である。

日本からの飛行機だとグアムまで4時間弱。グアムから南西に約2時間。

時々、JALの直行便があるらしい。

また台湾や韓国からも直行便が飛んでいる。

首都があるコロール島は明石市と同じ東経135度にある。つまり日本の真下。

パラオから西に位置するフィリピンまでは、東京~札幌間程度の距離で、グアムより近い。

海洋性熱帯気候で常夏。日中の平均気温は30を超え。海が、とてつもなく綺麗。



のんびりとした南の島なのだが、実はこの国は1944年に、太平洋史上に残る熱く厳しい戦いがあったペリリュー島があるところなのだ。

パラオの概略

- 1.面積： 488km² (屋久島とほぼ同じ)
- 2.人口： 19,129人 (2000年 国勢調査)
- 3.首都： コロール
- 4.人種： ミクロネシア系
- 5.言語： パラオ語、英語
- 6.宗教： キリスト教
- 7.略史：
 - 1500年代 スペイン人がミクロネシアの島々を発見。
 - 1899年 スペインはミクロネシアの島々を独に売却。
 - 1914年 第1次大戦始まる。日本はパラオを含む独領ミクロネシア(南洋群島)を占領。
 - 1920年 国際連盟から日本の(パラオを含む)ミクロネシア(南洋群島)委任統治が認められる。
 - 1941年 **第二次世界大戦**終了後、米軍占領始まる。
 - 1947年 国連の太平洋信託統治領として米国の統治始まる。
 - 1978年 住民投票の結果、パラオはミクロネシア地域の統一国家からの離脱を決定。
 - 1981年 憲法発布。自治政府発足。
 - 1994年 10月 米国との間の自由連合盟約が発効、独立。
 - 1994年 12月 国連に加盟

ペリリュー島

パラオの首都コロールから船で 2 時間ほど南西に行くと、ペリリュー島が現われる。飛行機だとわずか 20 分だ。

幅 2 キロ、長さ 8 キロ、人口約 600 人の小さな島である。

島の大半は、熱帯樹林のジャングルで覆われている。首都のコロール島、その北に位置するバベルダオブ島は火山性の大地だが、このペリリュー島は、隆起珊瑚礁で出来ていて、大地は石灰岩である。

その為に、ジャングルを切り開いた道はとても白く、太陽の照り返しがすごい。

また島の海岸は遠浅で、幾つかのビーチは白砂で覆われている。

特に有名な【オレンジ・ビーチ】も穏やかで静かな白砂ビーチである。



ジャングルを切り開いて作られた道。石灰岩の為に道は白く、照り返しが凄い。

オレンジ・ビーチ

白砂のロングビーチながら、名前が“オレンジ”とついているのは理由があった。

60 年前に『ペリリュー島の海水が、目に映るところすべて赤く染まったから』なのだ。

この小さな島でくりひろげられた戦闘は、これまでの島にまさる壮絶さだったという。

この海岸は 1944 年 9 月 15 日に始まった米軍のペリリュー島への最初の上陸地点だった。

米軍は、既に制空制海権を抑えており、その上陸前に相当の爆撃をこの島全土に行っていた。その数わずか 1 日で 6 万発におよんだらしい。

この時の米軍指揮官はこの島は 4 日で落とせると豪語していたという。

確かに、それまでに、

	日本兵	玉砕までの日数
サイパン	31,000 人	23 日
テニアン	5,000 人	7 日
グアム	18,000 人	20 日

という短さであった。

そしてこのペリリューには、10,000 人余りの日本兵が守っていた。

ペリリュー島攻略に当たり、米軍は空母 11 隻、戦艦 3 隻などからなる大機動部隊をくりだした。上陸作戦以前の米軍の徹底的な艦砲と爆弾によって、島の光景はすっかり変わり、真っ白い石灰石が露出した裸の島になってしまっていたらしい。

そして米軍海兵隊は、日本軍陣地はもう完全に破壊され、敗残兵狩りのみと感じていたという。

他の島でもそうだったように、日本軍は徹底した水際作戦を行った。つまり米軍が上陸寸前の海岸で迎え撃ち、至近距離から叩こうというものである。

特にこの海岸からの上陸を日本軍は予想しており、機雷や地雷の敷設をすると共に、米軍をかなりひきつけておいて一斉射撃するという作戦を立てていた。

そして、その作戦は見事に当たるのである。

この島は、今までの島とは違う事があった。

高地の斜面には数多くの洞窟陣地があり、上陸に先駆けた米軍の膨大な艦砲と爆弾を見事にかわし、米軍の予想とは裏腹に、戦力はほとんど維持されていたのだった。

そして……、

地雷と機雷に触れた米軍の上陸用舟艇が大きな音ともにふきあがる。

その無数の水柱に舟艇は砕かれ、折られ、瞬く間に海は朱に染まり、米兵の死体が海上に漂い出した。

浅瀬に累々と積まれた米兵の死体、その血がスコールに洗われて海面に流れ、ペリリュー島の海水は目に映るところ真っ赤に染まった。

これを見ていたアメリカ兵が、誰からともなくこの浜を【オレンジ・ビーチ】と呼ぶようになり、現在では【オレンジ・ビーチ】が正式名称になっている。

最初に上陸した米兵のほとんどが全滅してしまったという。

米軍の被害は日本軍の何十倍、何百倍に達した。米軍のこの日の戦死傷者は 1,749 名という記録がアメリカに残っているそうだ。

そして、そのあまりの戦死者が多かった為に、現在ではこの海岸に米軍の慰霊モニュメントが建てられている。

日本からは、この島へ、毎年 2000 ~ 3000 人の慰霊団が訪れるらしい。

アメリカ人の慰霊団がどの程度くるのかは分からないが、このモニュメントはきれいに掃除されており、花も飾られていたのが印象的だ。



オレンジ・ビーチにそびえる米軍慰霊モニュメント。数多くの米軍がこの場所から上陸しようとして倒れた。

上陸部隊は壊滅的な打撃を受けながら、それでも米軍は圧倒的な物量作戦を展開。

徹底的な砲撃で密林や断崖を平坦地にかえ、そこへ鉄板をひいて、戦車をはじめ、上陸部隊を続々と進めたという。

わずか 4 時間半の戦いで日露戦争の数年分の物量を消費したらしい。

その海岸近くをダイビングしてみると、その鉄板、数多くの砲弾、薬きょう、水陸両用車の残骸などを間近に観る事が出来る。

構造物は、すっかり魚礁になっており、60 年前の事など全く意識させない。

ペリリュー水際戦は、数多くの米軍戦史に、最も手こずったと明白に記されているほどである。



ペリリュー島上陸作戦でアメリカ軍が使用した鉄板が、海岸沿いに数多く沈んでいる。

この戦いを指揮したニミッツ提督はこう言っている。

「ペリリュー島の複雑極まる防備に打ち克つには、米国の歴史における他のどんな上陸作戦にも見られなかった最高の戦闘損害比率(約 40%)を甘受しなければならなかった。既に制海権制空権を持っていた米軍が、死傷者あわせて一万人を超える犠牲者を出して、この島を占領したことは、今もって疑問である」と。

ゼロ戦

それでも最新の兵器の発達、物量の差はあまりに大きく、制海制空権を握られている日本軍は総合力であまりに弱い。

特に空は…。

それまでの戦いで、日本のゼロ戦はことごとく打ち落とされていたという。

あるものはジャングルに、あるものは海中に、そのままの姿で保存?されている。

このジャングルに眠るゼロ戦は、道路からわずか 5 メートルのところであり、道路からも観る事が出来るのだが、あまりに無造作に放置されているので現地の人に教えてもらわないと全く気がつかない。

私も一度場所を教えてもらい、あとで撮影しようと再び訪れた時にはもう分からないというありさまだった。10 分も探してやっと見つけた。



ジャングルに眠っているゼロ戦。大決戦の際、ペリリュー島飛行場にある日本軍の飛行機はわずか 8 機だけだったらしい。

この海中に沈むゼロ戦は、1944年3月に墜落したもので、撃墜でなかったため、原形を留めている。

パイロットは19歳の青年だったそうで、彼は助かったようだ。もしかしたら、現在もご存命かもしれない。

アメリカ人の観光客には、コックピットに入り込んで記念撮影をするやからがいるらしい。ちょっとその辺の感覚は日本人とは違う。



首都コロールから、船で5分ほどの浅瀬にある。ある程度満ちてないと行けないのだが、プロペラの一部分が既に海面に出ている。

パラオでは、第二次大戦当時のものを動かしてはならないという法律がある為、この様にジャングルに、海底にいつまでも眠っているのだ(その旨は、入国する際に渡される書類にはっきりと明記されている)。

赤く錆びた戦車や高射砲などは、博物館などできちんと保管した方がいいのではないかと思うくらいの“放置状態”である。

しかし逆に、考え様によっては、そのような戦争の傷痕をそのままの状態にしておく事が、パラオの人たちの戦争に対する思い、戦争を忘れてはいけないという願いを表しているのかもしれないと感じた。

因みに、当時のペリリュー島民たちはこの時、日本兵とともに戦う決心をしていたようだ。しかし日本軍がこれを押しとどめ、宵闇に紛れて住民をパラオ本島へ避難させた。

そして戦争が終わりこの島へ戻ってくると、島のあまりの変わりように驚いたという。

それゆえに、今でもパラオの日本人に対する感情は極めて良いのだった。

そしてきちんと語り継がれていて、戦争の事を良く知っている。

しかし一方で、ゼロ戦を見て深く感じ入っている私に、パラオに住んでいる日本の方が語ってくれた。

『今、両親に連れられてパラオに来る子供たちは【ゼロ戦】という言葉を知らないんですよ...』

飛行場

戦場を、パラオ本島ではなくペリリュー島を米軍が選んだのは訳がある。

そして同時に、日本軍にとってもペリリュー島を防御する必要があった。

それは、ペリリュー飛行場である。サイパン玉砕後は東洋一だったらしい

ニミッツ提督率いる米太平洋艦隊は6月、すでにマリアナ海戦で勝利し、南太平洋における日本の機動部隊を潰滅させ、日本本土上陸作戦のための航空基地をテニアン島に確保していたが、マッカーサーがフィリピン奪還と沖縄攻略のためにペリリュー島を欲しがったという。

その飛行場に行ってみた。
そもそもジャングルを切り開いて作った飛行場なのだが、現在もジャングルの中に隠れるようにひっそりとある。

いやひっそりという言葉は、正しくないのかもしれない。飛行場というくらいだから、如何に田舎の空港と言えどもそのビルやタンク、付帯設備だのが周囲にあるのかと思っていたのだが、探しても全く無い。



旧日本軍が死守しようとした飛行場。グアム陥落後は東洋一だったらしい。滑走路だけだが、これでも今でも現役の飛行場だ。

その代わりに、長い滑走路がどーんとジャングルから突然現われるのだった。おそらく2~3Kmはあるだろう。

ただ一面コンクリートで覆われているのかと思いきや、所々草が生えている。ほおって置けば、その内にまたジャングルに戻ってしまいそうな感じだ。

当時、石灰石の土壌を平らにするのはたいへんだっただろうと容易に推察できる。

飛行場建設では沖縄から多くの働き手がやってきたらしい。パラオ在住日本人に沖縄の人が多かった理由の一つでもある。

パラオのお店では、沖縄のドーナツである『サターアングギー』が売られている。

当地では、【ダム】と呼ばれている。これも恐らく日本語だろう。

首都コロールからの飛行機は週に何便か通っている。しかしこの飛行場、滑走路以外には何も無い。管制塔もない。

ガイドブックの地図には、“空港ターミナル”なんてシャーシャーと書いてあるがそんなものはない。一応、掘っ建て小屋にベンチがあると聞いたが、探してもなかった。恐らく草木に覆われてしまったのだろう。

しかし、何も知らずにここへ来たら驚く事だろう。

そもそもこの飛行場はジャングルの中であって、一度ならず二度までも、その近くまで行っているが気づかなかったほどの場所だ。

標識もなければ、地図もない。もちろんタクシーなどはそもそも島内にない。

人さえも歩いていない。

ここから島の中心まで5キロほどである。迎えがなければ決して利用できない飛行機なのであった。

戦跡の数々

このペリリュー島以外にも、多くの日本軍の戦跡がある。

例えば、小さな島に、ぽっかりと穴が空いている。

天然の洞窟を日本軍が、海のガソリンスタンドとして利用したそうだ。

奥にはドラム缶が散乱している。

爆撃を受けて、周辺の岩は黒くこげているのが見えた。

また天然の洞穴を利用した砲撃台もある。

パラオは、潮の流れが速く、また海底は複雑な地形をしているようで、座礁の危険が高い。

安全な航路は限られている。

その為、この砲撃台は、その航路に向かって向けられているらしい。

普通大砲というのは、守るべき陸上側に設置されるものだが、そういう理由で、ちっちゃい孤島に設置された。ここを守る兵隊は、さぞかしこどくだったに違いない。

撮影した後に、その砲身の先に海鳥が羽をやすめにとまったのが印象的だった。

つづく



小さな島の天然洞窟を利用した、旧海軍の給油所。奥にはドラム缶が散乱している。爆撃され、岩が黒くこげている。



小さな島の天然洞窟を利用した砲台。海路を通る米軍を攻撃する為に設置されていた。